

# 北イラク、テル・アシク遺跡で採集された 後期新石器時代の彩文土器片について

近藤 康久

Painted Potsherds from Late Neolithic Tell Ashiq in North Iraq

Yasuhisa KONDO

キーワード：後期新石器時代、プロト・ハラフ期、北イラク、テル・アシク、ハラフ彩文土器

Key-words: Late Neolithic, Proto-Halaf, North Iraq, Tell Ashiq, Halaf Painted Pottery

はじめに

補正年代で紀元前 5900 年頃、後期新石器時代の北メソポタミアに、ハラフ (Halaf) と呼ばれる考古文化が出現する。ハラフ文化はこれまで、精製の彩文土器をはじめ、トロス (*tholos*) と呼ばれる円形建築や、スタンプ印章と封泥を用いた物資管理システム、定型的な人物土偶などから構成される「文化パッケージ」(Nieuwenhuys 2000: 151) として認知されてきた。その文化的領域は、ユーフラテス川とティグリス川の間を占める北メソポタミア (ジャジラ) 平原を中核地帯とし、西は北レヴァント、北は南東アナトリアの山麓地帯、東はザグロス山麓、南は中部メソポタミアの広大な範囲におよぶ (常木 2004: 31)。

20 世紀初頭にハラフ文化が最初に定義されて以来、長い間、在地の新石器文化からハラフ文化へ連続的移行を示す証拠は知られていなかった。そのため、ハラフ文化の起源に関してはさまざまな推測がなされ、東アナトリアの山岳地帯など外部に起源を求める議論がなされることもあった (Mellaart 1970: 281; Bogoslovskaya 1972)。しかし近年、北シリアにおけるユーフラテス川の支流の一つ、バリーフ (Balikh) 川の流域に所在するテル・サビ・アビヤド (Tell Sabi Abyad) 1 号丘において、彩文土器やトロス、スタンプ印章と封泥を用いた物資管理システムといった文化要素がハラフ直前の移行期にはすでに存在し、そこからハラフ文化へ継承されることが立証された (Akkermans (ed.) 1989, 1996)。特に土器に関しては、移行期を通して、南方のサマツラ系の精製彩文土器群がハラフ土器へと漸移的に発展していく過程が明らかになった (Le Mièrre and Nieuwenhuys 1996)。

サビ・アビヤドの発見以来、バリーフ地区より西方のユーフラテス川中流のテル・ハルラ (Tell Halula) 遺跡 (Sagona and Sagona 1988) や、東方のハブール (Khabur) 川上流平原のテル・チャガル・バザル (Tell Chagar

Bazar) 遺跡 (Cruells and Nieuwenhuys 2005) など、北メソポタミアの各地で、サビ・アビヤドと同様の文化発展を示す集落が報告されるようになった。しかし、そのことが、結果として後期新石器時代の編年枠組みに新たな問題を投げかけることとなった。つまり、これまでハラフ期直前の段階の位置づけが地域ごとに異なっていたため、地域間の文化発展の共通性について統一的な視点に立って議論しようとする混雑をきたすことになったからである。たとえば、北シリアでは近年、ハラフ期に先行する土器新石器時代にプレ・ハラフ期、ハラフ直前の段階に「移行期」という呼称が用いられる傾向にある (Akkermans and Schwartz 2003; 本稿表 1)。バリーフ川流域の地域編年では、バリーフ II 期がプレ・ハラフ期、バリーフ IIIA 期が移行期に対応する (Akkermans 1993)。ところが、ハブール以東の地域では、プレ・ハラフ期に相当する段階はプロト・ハッスーナ期およびハッスーナ期と呼ばれる (Campbell 1992a)。ハラフ期直前の段階はハッスーナ期の後葉すなわちハッスーナ III 期に位置づけられるが、従来この地方にはハラフ文化への明確な移行を示す遺跡が知られていなかったため、この段階を「移行期」と呼ぶのはなじみが薄い。こうして、時期名称の間に齟齬が生じてしまっている。

このような問題に対処するため、最近、「移行期」に相当する段階、すなわちプレ・ハラフ期とハラフ期を橋渡しする段階に対して、「プロト・ハラフ (Proto-Halaf) 期」という時期的枠組みが提案された (Cruells and Nieuwenhuys 2005)。この用語は、もっぱら土器編年上の時期を意味し、「プロト・ハラフ人」あるいは「プロト・ハラフ文化」というようなエンティティーは想定されない (Cruells and Nieuwenhuys 2005)。「プロト・ハラフ期」という言葉は、それ自体がハラフ期への移行を暗示するという欠点をもつが、本稿では、実際に移行段階が存在したかど

うかに関わらず、ハラフ直前の時期に対して地域編年の垣根を越えた統一的枠組みを設定するために、この語を採用することにする。ハブール以東のハッスーナ III 期も、便宜上プロト・ハラフ期に含めることにする。ただし、地域ごと・遺跡ごとに移行段階の様相が異なっている可能性が高い (Cruells and Nieuwenhuys 2005) という指摘には留意する必要がある。

また、サビ・アビヤド 1 号丘の第 3 層から第 1 層で検出された文化層を、報告者は「ハラフ前期」と呼んでいるが (Akkermans 1996)、実際には伝統的なハラフ前期に先行する段階であることが知られているので、本稿ではこの段階を便宜上「ハラフ成立期」(常木 2004) と呼ぶことにする。

さて、このように、シリア北部において、プロト・ハラフ期からハラフ成立期にかけての文化的連続性が立証されたわけだが、隣接するイラク北部地域はどのような状況だったのだろうか。

北イラクにおける調査の状況

シンジャール山北麓とティグリス川流域のモースル市周辺を含む北イラク = ジャジラ平原 (Northern Iraqi Jazireh Plain) では、これまでにいくつかの後期新石器遺跡で学術調査が行われてきた (図 1 および表 1)。ティグリス川東岸のニネヴェ (Nineveh) 遺跡 (Mallowan 1933) や、西岸のテル・ハッスーナ (Tell Hassuna) 遺跡 (Lloyd and Safar 1945) およびヤリム・テベ (Yarim Tepe) 遺跡 1 号丘 (Merpert and Munchaev 1993a) では、プロト・ハラフ期に併行するハッスーナ文化に属する集落が確認されている。ハッスーナ文化後半段階のアセンブリッジにはサマツラ土器が共伴することから、近年、この段階は「北方」サマツラ (Gut 1995) という枠組みで認知されるようになった。いっぽう、プロト・ハラフ期に後続する時期に関しては、ニネヴェ近傍のアルパチヤ (Arpachiyah) 遺跡において、ハラフ前期から後期まで連

表 1 プレ・ハラフ期からハラフ前期にかけての編年枠組み (Nieuwenhuys 2000; 常木 2004; Cruells and Nieuwenhuys 2005 に基づく)

| 時 期             | プレ・ハラフ期<br>Pre-Halaf | プロト・ハラフ期<br>Proto-Halaf<br>(Transitional) | ハラフ成立期<br>Early Halaf | ハラフ前期<br>Traditional<br>Early Halaf |
|-----------------|----------------------|---|-----------------------|-------------------------------------|
| 補正年代 cal. BC    | 6300                 | 6100                                      | 5950                  | 5850                                |
| 北レヴァント          |                      |   |                       |                                     |
| サクチャギョズ         | Period I             | ?   | ?                     | Period II                           |
| ドムズテベ           |                      | ?   |                       |                                     |
| テル・ジュダイダ        | Amuq B               |   | First Mixed Range     |                                     |
| テル・アイン・エル・ケルク   | Rouj 2c              | ?   | Rouj 2d               |                                     |
| ユーフラテス川流域       |                      |   |                       |                                     |
| フストックル・ホユック     |                      |   |                       |                                     |
| テル・ハルーラ         | HL-III               | HL-IV                                     | HL-V                  |                                     |
| テル・バグーズ         |                      |   |                       |                                     |
| バリーフ川流域         | バリーフIIC              | バリーフIIIA                                  | バリーフIIIB              | バリーフIIIC                            |
| カザネ・ホユック        |                      | ?   | ?                     |                                     |
| テル・サビ・アビヤド 1 号丘 | Level 11-8           | L.7 Level 6-4                             | Level 3-1             | NE Mound                            |
| ハブール川流域         |                      |   |                       |                                     |
| テル・ハラフ          |                      | ?   |                       |                                     |
| テル・アカブ          |                      |   |                       |                                     |
| テル・チャガル・バザル     |                      |   | ?                     |                                     |
| テル・ボエイド 2 号丘    |                      |   |                       |                                     |
| モースル・シンジャール地区   | ハッスーナI・II            | ハッスーナIII                                  | ハラフIa                 | ハラフIb                               |
| ヤリム・テベ 1 号丘     | Level 8-7            | L.6                                       |                       |                                     |
| ヤリム・テベ 2 号丘     |                      |   |                       | Level 9-8                           |
| ヒルベト・ガルスール      |                      |   |                       |                                     |
| NJP 72          |                      | ?   |                       |                                     |
| テル・アシク          |                      |   |                       |                                     |
| ニネヴェ            | IIa                  | IIb                                       |                       | IIc                                 |
| アルパチヤ           |                      |   |                       | Period 1-2                          |
| テル・ハッスーナ        | Level Ib-II          | Level III-V                               | ?                     | Level VI                            |
| ティグリス川中流域       |                      |   |                       |                                     |
| サマツラ            |                      |   |                       |                                     |
| テル・エッ・ソワン       | Level II             |   | Level III-IV          |                                     |

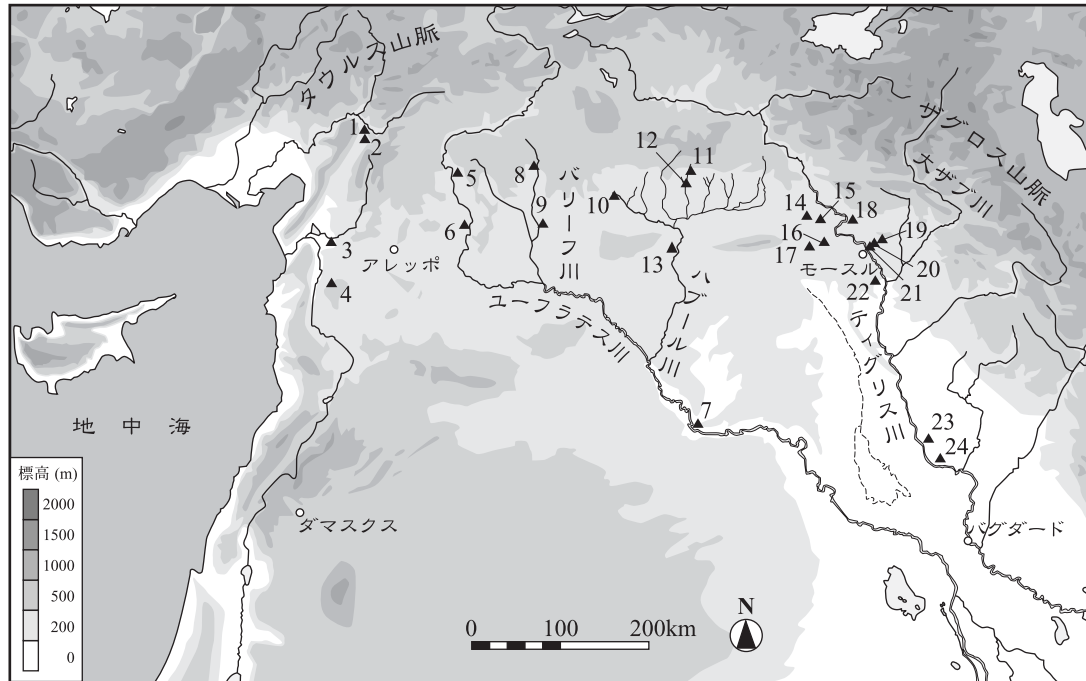


図1 本稿に関連する遺跡 (常木 2004; Cruells and Nieuwenhuys 2005 に基づく)

- 1: ドムズテベ 2: サクチャギョズ 3: アル・ジュダイダ 4: ケルク 5: フストウクル・ホユック 6: ハルーラ 7: バグーズ 8: カザネ・ホユック 9: サビ・アビヤド 10: ハラフ 11: アカブ 12: チャガル・バザル 13: ボエイド 14: NJP 72 15: ヒルベト・ガルスール 16: アシク 17: ヤリム・テベ 18: ヒルベト・ハタラ 19: カラ・テベ 20: アルパチャ 21: ニネヴェ 22: ハッサーナ 23: サマツラ 24: ソワン

続する長期的な居住が確認されている (Mallowan and Rose 1935; Hijara 1997)。また、ニネヴェやテル・ハッサーナの上層にもハラフ期の堆積が存在する。しかし、いずれの遺跡においても、サビ・アビヤド1号丘のようにプロト・ハラフ期と伝統的なハラフ前期を直接橋渡しする文化段階は見つからなかった。そのため、北イラクでは外来のハラフ文化が在地のハッサーナ文化に置き換わると考えられていた (Merpert and Munchaev 1993b: 161)。

1980年代後半、シンジャール山北麓のテル・アル・ハワ (Tell al-Hawa) 地区で緊急調査プロジェクトが実施され、ハッサーナ期とハラフ期の遺跡がそれぞれ30か所以上同定された (Wilkinson and Tucker 1995)。このうち、ヒルベト・ガルスール (Khirbet Garsour) 遺跡では、試掘調査によってハッサーナ III 期に帰属する土器片と井戸遺構が検出された (Campbell 1992a, 1997)。また、近傍の NJP 72 遺跡では、ハラフ成立期から中期に至る遺物が集中的に採集された (Campbell 1992a, 1997)。両遺跡の彩文土器資料が形態的に類似していることから、キャンベルは、北イラクでも北シリアと同様に、ハッサーナ=サマツラ土器伝統からハラフ土器伝統への連続的發展が起り、ハラフという考古文化がユーフラテス川から北イラクにかけての広範な地域で同時進行的に形成された可能性を指摘している (Campbell 1992a: 205-218, 1992b, 1997)。

しかしながら、北イラクでも北シリアと同様に在地の新石器文化からハラフ文化が連続的に形成されたとするキャンベルの主張は、現状ではまだ論証不足である。なぜなら、この地域ではプロト・ハラフ期からハラフ成立期へ連続する文化層序がいまだに検出されていないからである。たしかに、常木 (2004: 95) が指摘するように、ティグリス川東岸のエスキ・モースル・ダムの水没地区に所在するヒルベト・ハタラ (Khirbet Hatara) 遺跡最下層 (第1層) のウバイド文化層には、ハラフ成立期にさかのぼる土器片が相当数混入している (Fiorina 1997, 2001)。同様に、ハラフ前期以降の標式遺跡であるアルパチャからも、複数段の連続菱形格子文が描かれたS字鉢 (図3: 12) など、ハラフ期初頭の資料に類似するものが報告されている。さらに、アルパチャの北東約10kmの地点に位置するカラ・テベ (Kara Tepe) 遺跡の表採遺物にも、ハラフ成立期に典型的な土器片が混じっている (Hijara 1997: Fig.48, No.19)。しかし、これらのいずれの遺跡においても、ハラフ成立期の遺構は検出されておらず、それに先行する文化堆積が存在するかどうか不明である。このように、北イラクではプロト・ハラフ期とハラフ期の間の文化的連続性が実証されていないため、ハラフ文化が広範な地域で同時に形成されたという説に対して懐疑的な立場を取る研究者もいる (Akkermans 2000)。

実際のところ、北イラクではプロト・ハラフ期の在地新石器文化からハラフ文化への連続的移行が起こったのか。それとも、北シリアに起源したハラフが在地の文化に置き換わったのか。本稿では、この問題に答えるための一助として、北イラクのテル・アシク (Tell Ashiq) という遺跡で採集された土器資料を紹介したい。

#### テル・アシク遺跡

テル・アシク遺跡は、シンジャール山の東側の、エスキ・モースルとテル・アファルの間地点に位置する、長軸 150m、短軸 120m、比高 15m の遺丘である (Hijara 1997: 114)。遺跡の存在は 1937 年頃にロイドによって最初に報告された (Lloyd 1938: 135, No.10)。その後、1956 年頃には、東京大学の調査団による踏査が行われた (松谷 1997)。この時の表面採集資料の一部は、現在東京大学総合研究博物館に収蔵され、標本資料報告の形で出版されている (谷一・松谷 1981)。1970 年代には、イラク当局のヒジャラによって表採調査が行われ、ハッスーナ=サマッラ期、ハラフ期、ウバイド期、ガウラ期と続く重層遺跡であることが確認された (Hijara 1997)。

このヒジャラの報告に掲載されている表採資料の模式図に、水平線と斜線を集合的に組み合わせた水平斜格子文で装飾されたクリーム・ボウルが含まれている (Hijara 1997: Fig.47, No.16)。この文様の出現時期は、プロト・ハラフ併行期からハラフ成立期に限定されるので (近藤 2004)、テル・アシクにはこれらの時期の文化遺物が存在するものと予想される。そのため、この遺跡は、北イラクにおけるハッスーナ文化とハラフ文化の編年的関係を明らかにするための手がかりとなる可能性がある。にもかかわらず、この遺跡の帰属時期はこれまであまり積極的に評価されてこなかった。したがって、テル・アシク遺跡の採集遺物を再評価し、その帰属時期を確定することは、今後の研究に寄与するものと考えられる。

テル・アシク遺跡の位置づけを再確認するために、筆者は東京大学総合研究博物館考古美術部門に収蔵されている同遺跡採集土器標本の観察調査をおこなった。これまでに主要遺跡から報告された資料の図版を手がかりに、胎土・器形・文様などの属性を総合的に判断して、テル・アシク遺跡採集標本の中から、プロト・ハラフ期からハラフ前期に属する資料を抽出した。さらに、その中から口縁部・底部・壺の肩部などで器形と文様の同定できる標本 21 点を選び、属性の記載と図化をおこなった。

#### 土器資料の検討

テル・アシク遺跡で採集された標本は、一見して北イラクでこれまで知られている資料と比較可能であることが分

かる。同時に、一部の資料がテル・サビ・アビヤド 1 号丘の事例と極めてよく似ていることにも気がつく (図 2)。

まず、資料中には標準ハッスーナ彩文土器と比較可能な標本が存在する。口縁外面に山形文、内面にジグザグ文をもつ鉢の破片 (図 2: 1) は、ニネヴェ遺跡に類例がある (図 3: 1)。

次に、サマッラ的な文様要素をもつ土器片の存在を指摘することができる。鉢の口縁内外に描かれる短い垂下文 (図 2: 2) や、有頸壺に描かれる格子模様の山形文 (図 2: 3)、縦線文・三角文・水平区画線・山形文の組み合わせ (図 2: 4)、あるいは山形文とその空白部分に斜格子を充填するデザイン (図 2: 5) は、ヤリム・テベ 1 号丘上層のサマッラ土器やサビ・アビヤド第 6 層～第 4 層の標準精製土器のスタイル (図 3: 2-4) と一致するので、プロト・ハラフ期後葉に位置づけられる。ただし、三角文や格子入りの山形文などはサビ・アビヤド第 3 層から第 1 層のハラフ精製土器にも見られるので、ハラフ成立期に下る可能性もある。

そして、最も重要なことに、テル・アシクには確実にハラフ成立期に年代づけられる資料が存在する。クリーム色の器面の外面に水平斜格子文、内面に細長い垂下文を黒色顔料で描いた鉢 (図 2: 6) は、サビ・アビヤドの第 3 層から第 1 層に類出し、ハラフ成立期の土器を最もよく特徴づける資料である (図 3: 5)。外面に集合垂直線と集合斜線からなる垂直斜格子文を配置したクリーム・ボウル (図 2: 7) は、水平斜格子文が垂直斜格子文に置き換わった以外、器形・文様ともに上記の典型資料と一致するので、同時期に年代づけられる可能性が高い。

この他、アルパチヤの下層のような伝統的なハラフ前期に併行する資料も存在する。外面を斜格子文で装飾した鉢 (図 2: 8-9) には、口唇の内面に縁取りが見られるので、ハラフ彩文土器である可能性が高い。口縁下に水平線を挿入し、その下に間隔の広い斜格子文を施す事例 (図 2: 8) は、アルパチヤのハラフ前期層に類例が認められる (図 3: 6)。外面に縦線および点列の反復と水平ジグザグ文、内面に連弧文をレイアウトした鉢 (図 2: 11) は、アルパチヤのヒジャラ第 1 期に特徴的な資料である (図 3: 8)。また、花卉具象文で装飾される鉢 (図 2: 12-13) は、ヤリム・テベ 2 号丘第 9 層・第 8 層 (図 3: 9) とアルパチヤのヒジャラ第 2 期 (図 3: 10) に類例を求めることができる。平底鉢の底部には、基部の縁取りの上に連続菱形格子文が描かれたもの (図 2: 14) も見られるが、これはハラフ前期に北メソポタミアの広範な地域で普遍的に見られるデザインである (図 3: 11)。

最後に、資料中にはハラフ中期以降に位置づけられる遺物を見いだすことができる。まず、胴部下半が屈折し、外面が斜格子文で飾られる鉢の破片 (図 2: 15) は、二階調

を呈する口縁内面の鋸歯文が、ハラフ中期以降に出現する多彩文の技法を喚起する (Nieuwenhuys 私信)。実際、ヒジャラ 10-9 層から出土したハラフ中期の資料に、同様の鋸歯文を施す事例がある (図 3: 13)。また、胴部が強い丸みを帯びる短頸壺 (Büchse) の破片に見られる点列文 (図 2: 16) や 2 本の波線の間を点で充填する鎖状点列文 (図 2: 17) は、アルパチャの TT10 以前の層位からすでに見られる (図 3: 14)。

#### テル・アシク遺跡採集資料の位置づけ

以上の観察結果をまとめると、テル・アシク遺跡の表採資料には、プロト・ハラフ期からハラフ成立期を経て伝統的なハラフ前期・中期に至る遺物が含まれる。以下、これらの資料の地理的・編年的な位置づけについて、若干の予

察を提示してみたい。

テル・アシク遺跡の表採資料は、いずれの時期においても近傍の遺跡と強い類似性を示す。たとえば、ジグザグ文や山形文、格子文を特徴とする土器片 (図 2: 1-5) は、ニネヴェ遺跡やヤリム・テペ 1 号丘上層の土器アセンブリッジに類例を求めることができるし、水平斜格子文鉢 (図 2: 6) は NJP 72 遺跡およびヒルベト・ハタラ遺跡最下層、集合ジグザグ文 (図 2: 11) ・花卉具象文 (図 2: 12-13) ・連続菱形格子文 (図 2: 14) で飾られた鉢はヤリム・テペ 2 号丘下層およびアルパチャ遺跡下層の遺物と比較可能である。人工遺物のスタイルが類似するのは相互交流の結果である (Plog 1980) という前提に立てば、テル・アシク遺跡が各時期において近傍の遺跡と相互作用関係を保っていたことは想像に難くない。

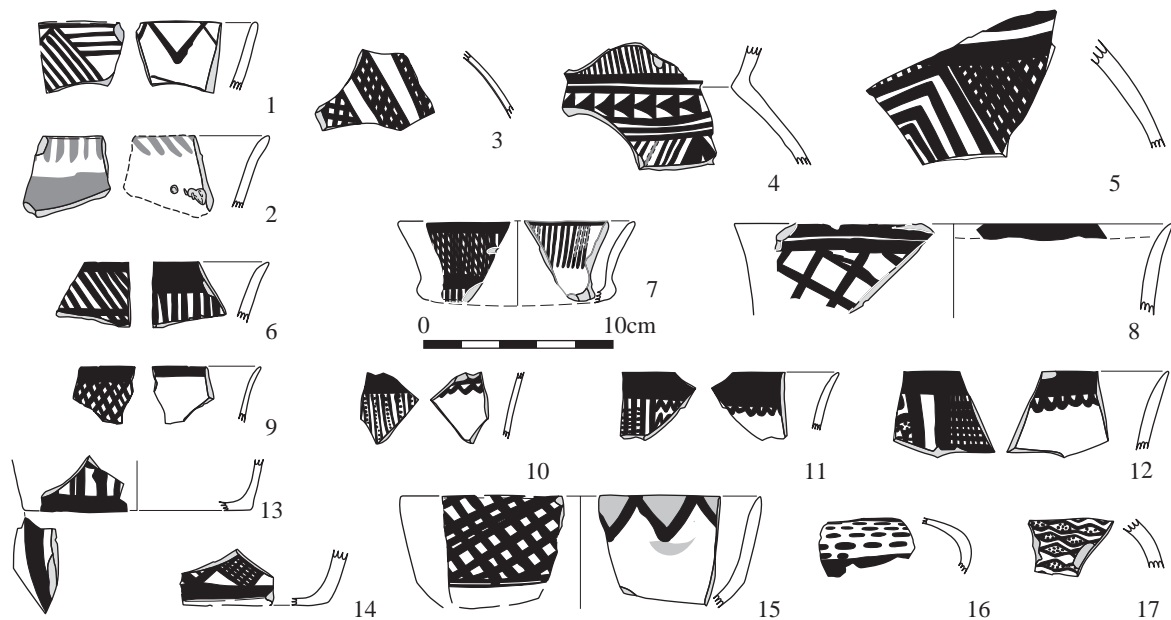


図 2 テル・アシク遺跡採集土器標本 (東京大学総合研究博物館蔵)

#### 【標本観察記録】

※図版番号、博物館標本番号、器壁厚 (T)、口縁口径 (D)、混和材、器面調整、器面色調 (マンセル・コード)、彩文色调 (マンセル・コード) の順に記載

- 1: IQ-A6-016, T: 6.5mm, ナデ調整、器面: 淡黄色 (10 YR 7/3)、彩文: 赤褐色 (5 YR 4/4)
- 2: IQ-A6-012, T: 6.4mm, ナデ調整、器面: 淡黄色 (10 YR 7/3)、彩文: 褐色 (7.5 YR 5/4)
- 3: IQ-A6-044, T: 5.7mm, 鉍物粒 + 砂粒 + 石灰粒、ナデ調整 + スリップ、器面: 淡黄色 (2.5 Y 7/2)、彩文: 暗褐色 (7.5 YR 3/1)
- 4: IQ-A6-021, T: 7.5mm, 石灰粒、ナデ調整、器面: 桃色 (7.5 YR 7/2)、彩文: 赤色 (10 R 5/6)
- 5: IQ-A6-047, T: 8.7mm, 石灰粒、ナデ調整、器面: クリーム色 (10 YR 8/2)、彩文: 赤褐色 (2.5 YR 4/4)
- 6: IQ-A6-019, T: 6.0mm, ナデ調整、器面: クリーム色 (10 YR 8/3)、彩文: 黒色 (10 YR 2/1)
- 7: IQ-A6-014, T: 4.5mm, D: 124mm, 器面: クリーム色 (2.5 Y 8/2)、彩文: 黒色 (7.5 YR 2/1)
- 8: IQ-A6-008, T: 6.6mm, D: 230mm, ナデ調整、器面: 淡黄色 (5 Y 7/3)、彩文: 赤褐色 (5 YR 3/4)
- 9: IQ-A6-020, T: 3.1mm, ナデ調整、器面: 明褐色 (7.5 YR 6/4)、彩文: 暗褐色 (10 YR 3/3)
- 10: IQ-A6-037, T: 3.5mm, 器面: 淡黄色 (2.5 Y 7/3)、彩文: 暗褐色 (10 YR 3/3)
- 11: IQ-A6-015, T: 4.0mm, ナデ調整、器面: 淡黄色 (10 YR 7/3)、彩文: 灰褐色 (5 YR 4/2)
- 12: IQ-A6-010, T: 5.6mm, ナデ調整、器面: クリーム色 (10 YR 8/2)、彩文: 暗褐色 (10 YR 3/1)
- 13: IQ-A6-026, T: 4.6mm, ナデ調整、器面: 桃色 (7.5 YR 7/3)、彩文: 黒色 (7.5 YR 2/1)
- 14: IQ-A6-025, T: 4.6mm, ナデ調整、器面: 桃色 (7.5 YR 7/4)、彩文: 暗褐色 (10 YR 2/2)
- 15: IQ-A6-009, T: 6.0mm, D: 190mm, 石灰粒、ナデ調整、器面: クリーム色 (10 YR 8/2)、彩文: 褐色 (7.5 YR 3/4)
- 16: IQ-A6-031, T: 4.3mm, 器面: 淡黄色 (10 YR 7/2)、彩文: 黒色 (10 YR 2/1)
- 17: IQ-A6-032, T: 8.4mm, 石灰粒、ナデ調整 + スリップ、器面: クリーム色 (2.5 Y 8/2)、彩文: 黒色 (10 YR 2/1)

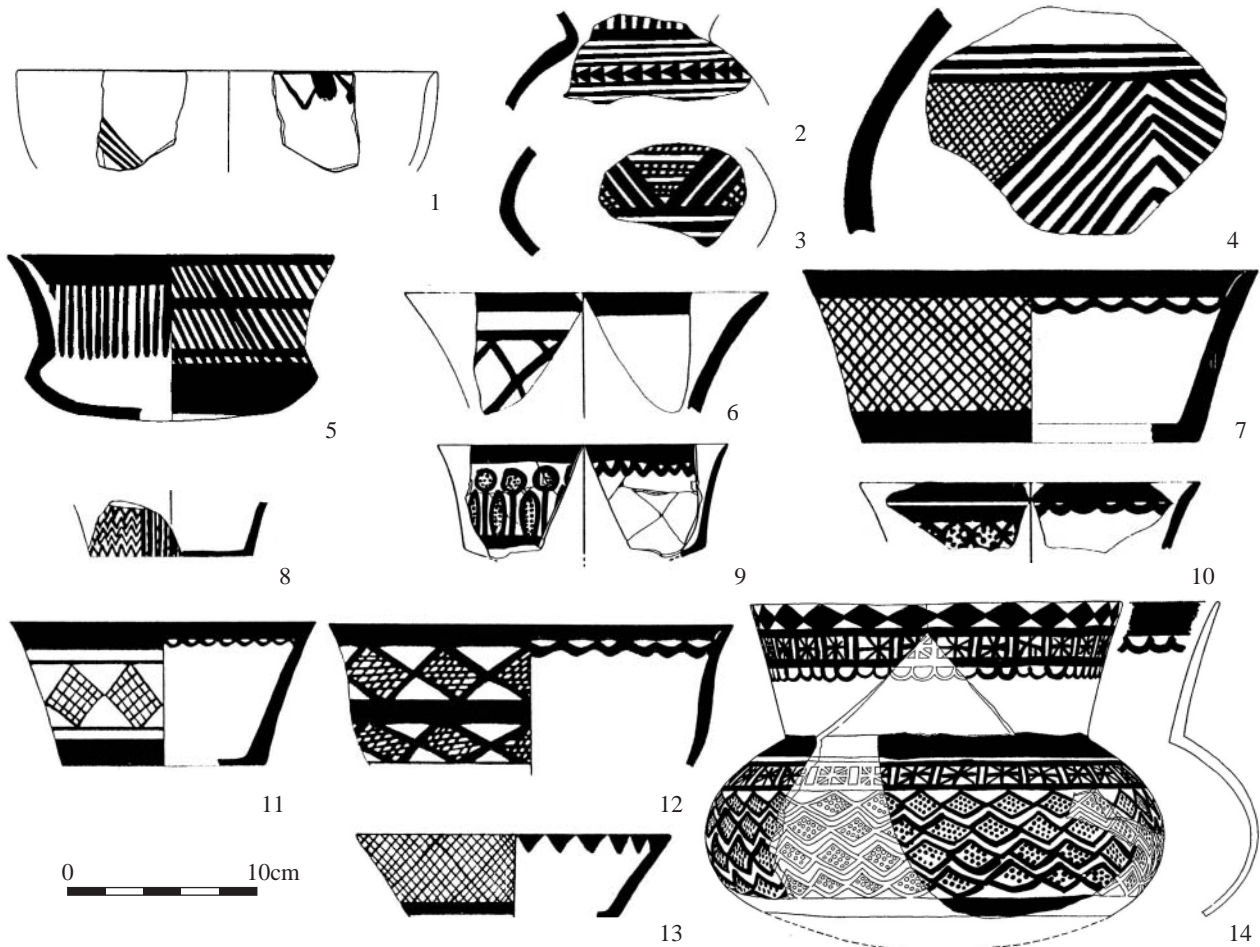


図3 テル・アシク遺跡採集資料と比較可能な発掘資料

- 1: ニネヴェ、標準ハッサーナ土器、プロト・ハラフ期 (Gut 1995: Tafel 11, 118)
- 2-3: サビ・アビヤド1号丘主発掘区第4/5層、移行期標準精製土器、プロト・ハラフ期 (Le Mière and Nieuwenhuys 1996: Fig.3.30, 6-7)
- 4: サビ・アビヤド1号丘主発掘区第4層、移行期標準精製土器、プロト・ハラフ期 (Le Mière and Nieuwenhuys 1996: Fig.3.30, 15)
- 5: サビ・アビヤド1号丘主発掘区第3層、ハラフ精製土器、ハラフ成立期 (Le Mière and Nieuwenhuys 1996: Fig.3.38, 6)
- 6: アルパチャ・ヒジャラ第2期、ハラフ土器、ハラフ前期 (Hijara 1997: PL.VII, 46)
- 7: アルパチャ・ヒジャラ第1期、ハラフ土器、ハラフ前期 (Hijara 1997: PL.I, 1)
- 8: アルパチャ・ヒジャラ第1期、ハラフ土器、ハラフ前期 (Hijara 1997: PL.II, 11)
- 9: ヤリム・テベ2号丘第8/9層、ハラフ土器、ハラフ前期 (Merpert and Munchaev 1993b: Fig.8.28, 8)
- 10: アルパチャ・ヒジャラ第2期、ハラフ土器、ハラフ前期 (Hijara 1997: PL.XIX, 124)
- 11: アルパチャ・ヒジャラ第2期、ハラフ土器、ハラフ前期 (Hijara 1997: PL.V, 33)
- 12: アルパチャ・ヒジャラ第2期、ハラフ土器、ハラフ前期 (Hijara 1997: PL.LVI, 373)
- 13: アルパチャ・ヒジャラ第4A期、ハラフ土器、ハラフ中期 (Hijara 1997: PL.XVIII, 120)
- 14: アルパチャ・Pre-TT10、ハラフ土器、ハラフ前・中期 (Mallowan and Rose 1935: Fig.67, 1)

いっぽう、巨視的に見ると、テル・アシク遺跡の土器資料は、東西南北の遠方地域のうち、特に西方の北シリアからの文化的影響を色濃く受けている。まず、プロト・ハラフ期後葉に年代づけられる可能性の高い有頸壺(図2: 3-5)は、サマツラ様式の影響を強く受けているが、その文様構成はサマツラ文化の標式遺跡である中部メソポタミアのテル・エッ・ソワン遺跡やサマツラ遺跡の土器群ではなく、「北方」サマツラのグループ、特にサビ・アビヤド遺跡など北シリアのアセンブリッジに最も近い類例を求めること

ができる。プロト・ハラフ期には、北イラクのティグリス川以東の地で産出したビチュメンが、サビ・アビヤドまで運ばれて、標準土器の装飾に用いられたことも知られている (Connan et al. 2004)。したがって、この時期にはすでに北メソポタミアの東西に「相互作用領域 (Yoffee 1993: 263-265)」が確立していたと考えるのが妥当である。

次に、ハラフ成立期を特徴づける水平斜格子文と細長い垂下文で装飾された鉢(図2: 6)も、分布の中心は北シリアにあり、サビ・アビヤドで約130点、ハブール平原の踏

査遺跡で30点余りまとめて見つかったほか、北レヴァントから北イラクに至る広範な地域の遺跡から数点ずつ報告されている(図4)。この装飾パターンがプロト・ハラフ期の祖型から連続的に発展していく過程は、現時点ではサビ・アビヤドでしか確認されていない。このように北シリアに分布の重心をもつ装飾スタイルが、テル・アシクの土器片にも確認されたということは、この遺跡がハラフ成立期にも北シリア地域との文化的なつながりを有していたことを示す。

すでに指摘したように、北イラクにおいては、ハッスーナ=サマッラ文化とハラフ文化の編年的関係が問題となっている。テル・アシク遺跡において、ハッスーナ=サマッラ文化に属する土器片と、最古段階のハラフ文化を特徴づける土器片がともに採集されたことは、この問題を考える上での一助となろう。両者の時間的關係は、サビ・アビヤドにおいて確認されており、前者に相当する標準精製土器が主発掘区の第6層から第4層、後者に相当するハラフ彩文土器が第3層から第1層でアセンブリッジの主体を占める(Le Mière and Nieuwenhuys 1996)。北イラクにおいても、前者の時期にあたるヒルベト・ガルスール遺跡と、後者の時期に比定されるNJP 72遺跡の土器群の間には、時間差がほとんどないことが指摘されている(Campbell 1997)。とすれば、テル・アシク遺跡の場合も、「北方」サマッラ土器とハラフ土器の間には時間差があったとしてもわずかしかなないと考えるのが妥当であろう。

表採遺物というコンテキスト上の制約から、テル・アシ

ク遺跡においてハッスーナ=サマッラ文化とハラフ文化の間に断絶があるのか、連続的な発展が見られるのか、それとも一時的にオーバーラップするのか断定することはできない。しかしながら、表採資料の中に両方の文化に属する土器片が存在して、それらの間の編年上の時間差がほとんどないと考えられることには注意を要する。今後は、コンテキストの信頼できる発掘資料の追加を期待すると同時に、在地の新石器文化からハラフ文化への発展過程が、地域間でどのような共通点を持ち、地域ごとにどのように異なるのか、さらに検証を重ねていく必要がある。

#### 謝辞

本稿は、2004年12月に提出した修士論文の一部を再構成し、2005年6月に日本西アジア考古学会第10回大会・研究発表会(於・馬の博物館)で報告した内容に加筆修正を施したものである。指導教員である東京大学総合研究博物館の西秋良宏助教授からは、同館考古美術部門所蔵テル・アシク遺跡採集土器標本の観察を許可していただいた。東京大学考古学研究室の先生方、東京大学総合研究博物館のマーク・フェルファーフェン客員助教授、ライデン国立考古学博物館のオリフィエ・ニューウェンハイセ学芸員、バルセロナ大学のワルテル・クルーウェルズ研究員、早稲田大学西アジア考古学勉強会の諸氏からは、本稿の内容に関して多くの教示・助言をいただいた。2名の匿名の査読者からも、貴重なご意見を賜った。ここに記して謝意を表したい。

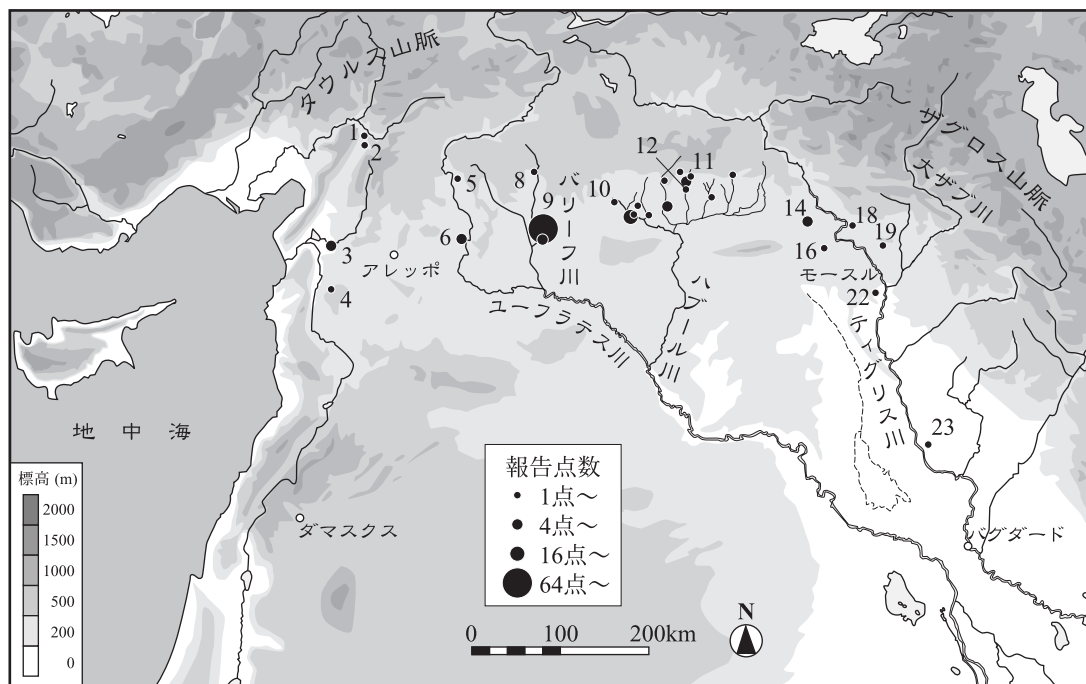


図4 ハラフ成立期における水平斜格子文土器の分布と報告点数(近藤2004に基づく)

## 参考文献

- Akkermans, P. M. M. G. 1993 *Villages in the Steppe: Late Neolithic Settlement and Subsistence in the Balikh Valley, Northern Syria*. *Archaeological Series 5*. Ann Arbor, International Monographs in Prehistory.
- Akkermans, P. M. M. G. 2000 Old and New Perspectives on the Origins of the Halaf Culture. In O. Rouault et M. Wäfler (eds.), *La Djéziré et l'Euphrate syriens de la protohistoire à la fin du II<sup>e</sup> millénaire AV. J.-C. Subartu 7*, 43-54. Turnhout, Brepols.
- Akkermans, P. M. M. G. (ed.) 1989 *Excavations at Tell Sabi Abyad: Prehistoric Investigations in the Balikh Valley, Northern Syria*. *BAR Int. Ser.* 468. Oxford, Archaeopress.
- Akkermans, P. M. M. G. (ed.) 1996 *Tell Sabi Abyad: The Late Neolithic Settlement. Report on the Excavations of the University of Amsterdam (1988) and the National Museum of Antiquities Leiden (1991-1993) in Syria*. Istanbul, Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut te Istanbul.
- Akkermans, P. M. M. G. and G. M. Schwartz 2003 *The Archaeology of Syria: From Complex Hunter-Gatherers to Early Urban Societies (ca. 16,000-300 BC)*. *Cambridge World Archaeology*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Bader, N. O., V. A. Bashilov, M. Le Mière et M. Picon 1994 Productions locales et importations de céramique dans le Djebel Sinjar au VI<sup>e</sup> millénaire. *Paléorient* 20/1: 61-68.
- Bernbeck, R., S. Pollock and C. Coursey 1999 The Halaf Settlement at Kazane Höyük: Preliminary Report on the 1996 and 1997 Seasons. *Anatolica* 25: 109-148.
- Bernbeck, R. and S. Pollock 2003 The Biography of an Early Halaf Village: Fıstıklı Höyük 1999-2000. *Istanbul Mitteilungen* 53: 9-77.
- Bogoslavskaya, N. F. (Богословская Н.Ф.) 1972 Sur le probleme de la formation de la culture de Halaf. (К проблеме сложения Халафской культуры) *Sovetskaya Arkeologiya* (Советская Археология) 1972/2: 3-16.
- Buisson, Le Comte Du Mesnil Du 1948 *Baghouz: L'ancienne corsôtê. Le tell archaïque et la nécropole de l'Age du Bronze*. Leiden, Brill.
- Campbell, S. 1992a *Culture, Chronology and Change in the Later Neolithic of North Mesopotamia*. Unpublished Ph.D. dissertation, University of Edinburgh.
- Campbell, S. 1992b The Halaf Period in Iraq: Old Sites and New. *Biblical Archaeologist* 55: 182-187.
- Campbell, S. 1997 Problems of Definition: The Origin of the Halaf in North Iraq. In M. Lebeau (ed.), *About Subartu. Studies Devoted to Upper Mesopotamia. Vol. 1 - Landscape, Archaeology, Settlement*. *Subartu 4-1*, 39-52. Turnhout, Brepols.
- Connan, J., O. P. Nieuwenhuys, A. Van As and L. Jacobs 2004 Bitumen in Early Ceramic Art: Bitumen-painted Ceramics from Late Neolithic Tell Sabi Abyad (Syria). *Archaeometry* 46: 115-124.
- Cruells, W., M. Molist and Ö. Tunca 2004 Tell Amarna in the General Framework of the Halaf Period. In Ö. Tunca et M. Molist (eds.), *Tell Amarna (Syrie) 1: La Période de Halaf*, 261-278. Louvain, Peeters.
- Cruells, W. and O. Nieuwenhuys 2005 The Proto-Halaf Period in Syria. New Sites, New Data. *Paléorient* 30/1: 47-68.
- Davidson, T. E. 1977 *Regional Variation within the Halaf Ceramic Tradition*. Unpublished Ph.D. dissertation, University of Edinburgh.
- Du Plat Taylor, J., M. V. Seton Williams and J. Waechter 1950 The Excavations at Sakçe Gözü. *Iraq* 12: 53-138.
- Fiorina, P. 1997 Khirbet Hatara: La stratigrafia. *Mesopotamia* 32: 7-62.
- Fiorina, P. 2001 Khirbet Hatara (Eski Mossul). La ceramica del livello 1. *Mesopotamia* 36: 1-47.
- Gut, R. 1995 *Das prähistorische Ninive: zur relativen Chronologie der frühen Perioden Nordmesopotamiens*. Mainz, Philipp von Zabern.
- Hijara, I. 1997 *The Halaf Period in Northern Mesopotamia*. *EDUBBA 6*. London, NABU Publications.
- Ippolitoni, F. 1971 The Pottery from Tell es-Sawwan - the First Season. *Mesopotamia* 5-6: 105-179.
- LeBlanc, S. A. and P. J. Watson 1973 A Comparative Statistical Analysis of Painted Pottery from Seven Halafian Sites. *Paléorient* 1/1: 117-133.
- Le Mière, M. and Nieuwenhuys, O. 1996 The Prehistoric Pottery. In P. M. M. G. Akkermans (ed.), *Tell Sabi Abyad: The Late Neolithic Settlement*, 119-284. Istanbul, Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut te Istanbul.
- Lloyd, S. 1938 Some Ancient Sites in the Sinjar District. *Iraq* 5: 123-142.
- Lloyd, S. and F. Safar 1945 Tell Hassuna: Excavations by the Iraq Government Directorate General of Antiquities in 1943 and 1944. *Journal of Near Eastern Studies* 4: 255-289.
- Lyonnet, B. (ed.) 2000 *Prospection archéologique Haut-Khabur occidentale (Syrie du N.E.) Volume I. Bibliothèque archéologique et historique* 155. Beyrouth, IFAPO.
- Mallowan, M. E. L. 1933 The Prehistoric Sondage of Nineveh 1931-2. *University of Liverpool Annals of Archaeology and Anthropology* 20: 127-177.
- Mallowan, M. E. L. and J. Rose 1935 Excavations at Tall Arpachiyah 1933. *Iraq* 2: 1-178.
- Mellaart, J. 1970 The Earliest Settlements in Western Asia: From the Ninth to the End of the Fifth Millennium B.C. *Cambridge Ancient History 3rd ed.* Volume I, Part 1, 248-303. Cambridge, Cambridge University Press.
- Mellaart, J. 1975 *The Neolithic of the Near East*. London, Thames & Hudson.
- Merpert, N. and R. M. Munchaev 1993a Yarim Tepe I. In N. Yoffee and J. J. Clark (eds.), *Early Stages in the Evolution of Mesopotamian Civilization: Soviet Excavations in Northern Iraq*, 73-114. Tucson, The University of Arizona Press.
- Merpert, N. and R. M. Munchaev 1993b Yarim Tepe II: The Halaf Levels. In N. Yoffee and J. J. Clark (eds.), *Early Stages in the Evolution of Mesopotamian Civilization: Soviet Excavations in Northern Iraq*, 131-162. Tucson, The University of Arizona Press.
- Nieuwenhuys, O. 1997 Following the Earliest Halaf: Some Later Halaf Pottery from Tell Sabi Abyad, Syria. *Anatolica* 23: 227-242.
- Nieuwenhuys, O. 1999 Tell Baghouz Reconsidered: A Collection of "Classic" Samarra Shards from the Louvre. *Syria* 76: 1-18.
- Nieuwenhuys, O. 2000 Halaf Settlement in the Khabur Headwaters. In B. Lyonnet (ed.), *Prospection Archéologique Haut-Khabur Occidentale (Syrie du N.E.) Volume I*, 151-264. Beyrouth, IFAPO.
- Nieuwenhuys, O., B. Van As, T. Broekmans and A. M. Adriaens 2002 Making Samarra Fine Ware - Technological Observations on Ceramics from Tell Baghouz (Syria). *Paléorient* 27/1: 147-165.
- Plog, S. 1980 *Stylistic Variation in Prehistoric Ceramics: Design Analysis in the American Southwest*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Redman, C. L. and P. J. Watson 1970 Systematic, Intensive Surface Collection. *American Antiquity* 35: 279-291.
- Sagona, A. G. and C. Sagona 1988 Prehistoric Finds from Jebel Haloula and Khirbet Meushrag, Northern Syria. *Mediterranean Archaeology* 1: 114-140.
- Von Oppenheim, M. und H. Schmidt 1943 *Tell Halaf I: Die prähistorischen*



- Funde*. Berlin, Walter de Gruyter.
- Wilkinson, T. J. and J. Tucker 1995 *Settlement Development in the North Jazira, Iraq: A Study of the Archaeological Landscape*. Baghdad, British School of Archaeology in Iraq, Department of Antiquities and Heritage.
- Wobst, H. M. 1977 Stylistic Behavior and Information Exchange. *Anthropological Papers, Museum of Anthropology, University of Michigan* 61: 317-342.
- Yoffee, N. 1993 Mesopotamian Interaction Spheres. In N. Yoffee and J. J. Clark (eds.), *Early Stages in the Evolution of Mesopotamian Civilization: Soviet Excavations in Northern Iraq*, 257-269. Tucson, The University of Arizona Press.
- 小高敬寛 2000 「北方におよぶサマッラ土器－共伴土器と器種構成からみたその展開－」『史観』144号 85-111頁。
- 近藤康久 2004『後期新石器時代の北メソポタミアにおけるハラフ彩文土器の成立について』東京大学大学院人文社会系研究科修士論文（未公開）。
- 谷一 尚・松谷敏雄 1981『東京大学総合研究資料館考古美術（西アジア）部門所蔵考古学資料目録 第1部 メソポタミア（イラク）』東京大学総合研究資料館。
- 常木 晃 2004『ハラフ文化の研究－西アジア先史時代への新視角－』同成社。
- 松谷敏雄 1997「西アジアにおける学術調査」西秋良宏（編）『精神のエクスペディション 東京大学創立百二十周年記念東京大学展 学問の過去・現在・未来 第二部』102-110頁 東京大学。

近藤 康久

東京大学大学院人文社会系研究科研究生

Yasuhisa KONDO

The University of Tokyo